

## ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成のための「ペア・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討：「コ・ファシリテーター体験」との比較

原賀，一敏  
九州大学大学院人間環境学府

野島，一彦  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/912>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.269-277, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成のための「ペア・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討 —「コ・ファシリテーター体験」との比較—

原賀 一敏 九州大学大学院人間環境学府  
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

## A case study on "Pair-Facilitator experience" of a basic encounter group for facilitator training — the comparison with "Co-Facilitator experience" —

Kazutoshi Haraga (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)  
Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This paper is a case study of a basic encounter group facilitator training by using the "Pair-Facilitator Method". In this study the "Pair-Facilitator experience" and "Co-Facilitator experience" which using the "Co-facilitator method" were compared and evaluated. The results are as below, ① Both experiences showed the similarity of Complementariness. ② There are differences in "Confidence for the facilitators". ③ The characteristics of the former shows less authoritative leadership style than the latter in the group process. ④ There is difference about the Supervision, whether being the supervisor as a veteran facilitator in group sessions. ⑤ "Pair-Facilitator Method" is one of a useful facilitator training for facilitator candidates having experiences of "Co-Facilitator experiences" and experiences of a basic encounter group as a member.

**Keywords:** basic encounter group, facilitator training, "Pair-Facilitator experience", "Co-Facilitator experience"

### 1. 問題と目的

ベーシック・エンカウンター・グループ (以下, EG) のファシリテーター養成の方法としては, ①文献による学習, ②観察による学習, ③シミュレーションによる学習, ④グループ体験による学習, ⑤スーパーヴィジョンによる学習, ⑥事例検討による学習, がある。(野島, 1990)。この中の④グループ体験による学習を細かくみると, メンバー体験, コ・ファシリテーター方式, Peer-Facilitator Training, 相互啓発方式などがある (野島, 1985)。

「コ・ファシリテーター方式」は, ベテラン・ファシリテーターとファシリテーター候補者がコンビを組み, EGのファシリテーションを行うスタイルのファシリテーター養成法である。「コ・ファシリテーター方式」によるファシリテーター養成の歴史は古く, 村山 (1979) もこれについて触れている。しかしそれについての研究は, 長い間行われてこなかった。ようやく最近になって福田・野島 (2002) が, 「コ・ファシリテーター方式」によるファシリテーター養成法の利点として, ①「ファシリテ

ーター意識」の自覚の変容が見られること, ②「ファシリテーション行動」の実践と自覚ができること, ③ファシリテーション行動の「観察学習」ができること, を指摘した。他方, 内田・野島 (2002) は, 「コ・ファシリテーター方式」は, ファシリテーター候補者であるコ・ファシリテーターが, ベテラン・ファシリテーターの権威や支配性に萎縮し従うばかりでは, ベテラン・ファシリテーターに呑み込まれるかもしれないという危険性があることを指摘した。

そのような権威性の問題に対応するためにわれわれは, グループ構造的に権威性の問題が生じにくいと思われる (従来の養成方法にはなかった) ファシリテーター養成法の形態として, 「ペア・ファシリテーター方式」(ベテラン・ファシリテーターのスーパーヴィジョンのもと, ファシリテーター候補者2人が組んでグループを担当) を考案し, 実施した。

本研究では, ファシリテーター養成のために「ペア・ファシリテーター方式」で実施されたEGの事例を提示し, 「ペア・ファシリテーター体験」と, 「コ・ファシリテーター方式」での「コ・ファシリテーター体験」との

比較考察を行い、両者の類似点と相違点を明確にすること、権威性の問題を検討すること等を目的とする。

尚、比較対照としての「コ・ファシリテーター方式」での“コ・ファシリテーター体験”には、福田・野島(2002)、内田・野島(2002)の研究を用いる。というのは、これらの研究のグループは、ファシリテーター養成という位置付けで行われており、今回のわれわれの「ペア・ファシリテーター方式」のグループと同じ位置付けだからである。

## II. 事例のグループ構成

### 1. エンカウンター・グループの位置づけ

グループは2日間の通い形式で、6セッション、計8時間半で、大学の学部生向けの授業(構成的EG)のオプション企画として実施された。メンバーは自発参加である。3グループが同時進行したが、そのうちの一つのグループがここで報告するものである。

### 2. メンバー編成

6名のメンバーと2人のファシリテーターは次の通りである。

A男：男性、学部3年、ベーシックEG経験なし。B男：男性、学部3年、ベーシックEG経験なし。C子：女性、大学院生、ベーシックEG経験1回。D子：女性、30代、聴講生、公務員、ベーシックEG経験2回。E子：女性、20代、留学生、ベーシックEG経験なし。F子：女性、20代、聴講生、ベーシックEG経験なし。ファシリテーター1：女性、20代、大学院生、ベーシックEGのメンバー経験9回。ファシリテーター2：筆者(男性、30代、大学院研究生、ベーシックEGのメンバー経験約20回)。

### 3. スケジュール

2001年11月3日、4日の2日間、実施された。

1日目=10:30-12:00は第1セッション、13:00-14:00は第2セッション、15:15-16:45は第3セッション、17:30-19:00は第4セッション。2日目=10:00-12:00は第5セッション、13:00-15:00は第6セッション。

### 4. 場所

場所は、大学内研修施設が用いられた。セッションルームは、10畳の和室であった。

### 5. リサーチ

参加者は、グループ経験前後の「参加者カード」、毎セッション後の「セッション・アンケート」の記述が求めら

れた。「参加者カード」は、参加前に、期待度、意欲度(7件法:1~7)の記入と参加前の気持ちについての自由記述、参加後に参加後の気持ちについて自由記述と満足度(7件法:1~7)の記入が求められるものである。「セッション・アンケート」は、セッションの感想についての記述とセッションの魅力度(7件法:1~7)の記入が求められるものである。「参加者カード」、「セッション・アンケート」の詳細については野島(1982)を参照されたい。

## III. 経過

経過については、「参加者カード」、「セッション・アンケート」より、ファシリテーションに焦点を当てて、記述していくこととする。そのため、「セッション・アンケート」の記述にファシリテーターについて言及された記述がなかったものは「無記入」とした。

### 1. 参加前の気持ち

[メンバーの参加前の気持ち]

A男：遅刻して参加のため、記述なし。B男：今回は初めての参加なので、どんなことをするのか期待より不安のほうが大きい。参加意欲は5、期待は5。C子：普段の授業で(構成的EGの授業)ではコ・ファシリテーターを担当。会うメンバーと同じメンバーとしてその場にいるということについて、今の段階では微妙な感じがする。参加意欲は4、期待は5。D子：構成的EGとの違いがどういうものか興味深い。今日は期待の方が大きい。参加意欲は7、期待は7。E子：非構成的EGとはどういうものか知りたい。それぞれの人によって効果が違うということを知っているから、そのことについて期待と不安がある。参加意欲は7、期待は7。F子：不安も大きいですが、このEGで自己がどのように変化していくのかという期待もある。参加意欲は6、期待は4。参加意欲度：メンバーの平均は5.80(SD=1.17)、期待度：メンバーの平均は5.60(SD=1.20)。

[ファシリテーターの参加前の気持ち]

ファシリテーター1：グループについて考えれば考えるほど不安が高まると思い、あまり考えずに来た。そのため、今は少し慌てている。参加意欲は5、期待は5。

ファシリテーター2：上手く滑り出してくれるかが不安。参加意欲は7、期待は6。

### 2. グループ・プロセス

《第1セッション》10:30-12:00

ファシリテーター1が語り、語り、また、語りたくないことについては語らなくていい。そういう場です。>と場面構成について発言する。ファシリテーター

2が「守秘義務」について触れる発言をし、枠づくりをする。A男が遅刻して登場。

ファシリテーター1より自己紹介の提案があり、ファシリテーター1から自己紹介する。(沈黙)。C子が、いつもの授業での役割と違い、他のメンバーと同じメンバーとして居ることへの違和感について語る。ファシリテーター2が、最近、自分の本質的な事柄について、実際の自分と違う見られ方をした出来事について触れ、その時の違和感について語り、自己紹介とする。D子がファシリテーター2の発言に触発され、「自分の思いと他者からの見られ方が違うのは、きつい。自身も職場で、自分の気持ちとは裏腹に、やらなければならないことが一致していないことがしばしばある」と語る。

E子が「自己紹介って、何を言っているのか分からない。だから、誰かが質問してくれると、応えられるので…」と発言。(短い沈黙) E子は留学生ということもあり、言語の問題もあるかと思い、ファシリテーター2がE子へ質問。D子もE子へ質問。これにE子が答える形で、E子の自己紹介が成立。B男が進路変更した理由について語り、この進路の方でやっていけるかどうかについての不安を語る。(沈黙)。セッション終了10分前に、ファシリテーター2が残り時間をメンバーに知らせ、発言を促す。A男が、「沈黙を破るのは難しい」と言いながらも、遅刻してきた理由を述べ、みんなに謝る。F子が進路についての迷いを語る。

[メンバーの感想]

A男：ファシリテーターは、話しの間がちょっと開いた時、上手い具合に雰囲気を作り出してくれたと思う。魅力度は6。B男：ファシリテーターは、メンバーに無理強いしたりして何かを促さないのが、よかった。魅力度は6。C子：ファシリテーターは2人ともゆっくりしているので、私自身も硬くならずゆったりとその場に居れた。魅力度は6。D子：沈黙の時、ついファシリテーターを見てしまう。指示待ちしてしまいそうになる。魅力度は5。E子：ファシリテーターは、誰かが話そうとするために、まず、自己紹介をして、その場の雰囲気を変えようと努力していた。魅力度は4。F子：ファシリテーターはもっとみんなを引っ張って、もっとしゃべるのかと思った。魅力度は4。/魅力度メンバー平均は5.17 (SD=0.90)。

(ファシリテーターの感想)

ファシリテーター1：ファシリテーター2がタイムアップ10分前に声をかけてくれた。おかげで、発言できなかった人がそこで発言できてよかった。魅力度は6。

ファシリテーター2：ファシリテーター1が流れを作る役割を取ってくれているので、そこで足りないものを補う役割に徹してもいいセッションだった。魅力度は7。

《第2セッション》13:00-14:00

ファシリテーター1が導入。(長い沈黙)。ファシリテーター2が、無言で、塩せんべいを、やや意図的がりがりと音を立てて食べ始め、メンバーに対し沈黙に気づかせる。この物音に反応し、D子が、笑いながら、「ファシリテーターの様子を見ていると。何か話さなければいけないのかと思ってしまう」と発言。A男が、「ファシリテーターも(沈黙の)責任は等分なのか」とファシリテーターの役割と沈黙について触れる発言をする。ファシリテーター2より、ファシリテーターの位置づけについて、やや教科書的になりすぎた感じがしながらも、説明する。

ファシリテーター1よりD子へく自分が話さなきゃという思いがあるのでは?と質問する。F子、D子、B男より、構成的EGとベーシックEGのイメージの違い、ファシリテーターの役割の違いについて語られる。(長い沈黙)。E子は、「みんなと少し違ってて、沈黙を結構、楽しんでた」と発言。ファシリテーター1より、<沈黙の意味が分からなくなった。沈黙を落ち着いていられるようになった人と、そうでない人がいるようで、何かバランスが悪いようだ>と、グループ全体の印象をフィードバックする。

[メンバーの感想]

A男：ファシリテーターの位置づけがわかり、しっくりきた感じ。魅力度は6。B男：ファシリテーターについての話題ものぼり、ぼんやりとファシリテーターがどういうものかわかってきた感じ。魅力度は5。C子：ファシリテーターは、ファシリテーターであることを意識せず、一緒になってその場にいるという感じがした。魅力度は6。D子：ファシリテーターの存在を自然に受け止めることができるようになった。話したい人が話せばいいというルールが浸透してきた。魅力度は7。E子：ファシリテーターの存在はあまり意識していなかった。私は沈黙を楽しんでいた。魅力度は4。F子：ファシリテーターは、ちょうどよい程度の役割加減だった。魅力度は5。/魅力度メンバーの平均は5.50 (SD=0.96)

(ファシリテーターの感想)

ファシリテーター1：ファシリテーター2は、自分に素直にいてくれて、わかりやすい。魅力度は6。

ファシリテーター2：ファシリテーター1が流れを作る役割は、前のセッションからの流れ。ファシリテーター1は楽しんでやってくれているようだ。魅力度は6。

ファシリテーターは、スタッフ・ミーティングにて、スーパーヴァイザーに展開を報告し、スーパーヴァイザーより、発展段階仮説(村山・野島;1977)などと照らし合わせて、グループが今どのような段階にあるかについて、コメントをもらう。

《第3セッション》15:15-16:45

ファシリテーター1の<じゃあ、始めましょうか>と

いう導入でグループが始まる。(短い沈黙)。E子が「休み時間は、みんな結構しゃべるのに、どうしてセッションが始まると黙ってしまうんでしょう」とセッション中とセッション外でのメンバーの様子の違いについてを、グループ全体にフィードバックする。(数人、笑って同感)。(沈黙)。D子より「集中力が下がってきて、何か別のことがしたい。…掃除がしたい。今、部屋があんまり片づいてなくて…」と発言。E子が、日本人は一人暮らしの人が多く、中国との違いについて語る。D子が一人暮らしをするに至ったいきさつと、一人暮らしをして思うことを語る。ファシリテーター1が「F子は?」と発言の少ないF子を気づかして振る。F子が「大学の時、一人暮らしで出て行くときは、母子ともにあっさりしたもんだ。すごくクールにお別れしたような気がする」とファシリテーター1の方を向き発言して、自身の家族との関係に言及する。ファシリテーター2よりE子へ「中国では、一人暮らしする学生は少ないの?」とE子の問うた質問を本人に戻して質問してみる。E子は「一人暮らしは一般的ではない」と中国の事情を語る。ファシリテーター1が「そんな中、留学されたのなら大変だったのでは?」とE子に返す。E子は「のびのびしています。」と予想外の答えを返し、一同笑う。D子は「私の場合は、兄の時と違って」と兄弟との違いに触れる発言をする。ファシリテーター1より「電話相談の仕事の中で、一人息子の母の寂しさは違うのではと感じたけど…」と男性メンバーへ振る。B男は「大学入学時、福岡に出て行くことになったら、近所に住んでる親戚一同が見送ってくれた」と家族とのお別れの体験について振り返る。ファシリテーター2はB男へ「親戚一同、見送ってくれるなんて、背負っている期待大きくて大変だったかな?」とフィードバックする。A男は「僕は次男だから…2週間も家に居れない」と自身の兄弟との関係について触れる。続けてA男は、今抱えている進路についての不安を語る。(沈黙)。C子は、「今できることをしようということで、ずっとやってきて、今のところにいるような気がする」と先輩の立場から、A男に対して、自身を振り返って発言する。D子は、A男の進路についての不安に触れた発言に触発され、就職活動の時の大変さを振り返り、「大学の頃の自由さが良かった」と語る。(沈黙)。

〔メンバーの感想〕

A男：ファシリテーターは、うまくグループに溶け込んでいる感じ。魅力度は6。B男：ファシリテーターとメンバーの違いは、表面的にはほとんどない。魅力度は6。C子：ファシリテーターも、いろいろと話してくれるので、ファシリテーターというよりも一メンバーとしてそこにいるような印象を持った。魅力度は6。D子：ファシリテーターについては、存在に異質さを感じなく

なった。魅力度は6。E子：無記入。魅力度は4。F子：ファシリテーターは目立ちすぎずよかったと思う。魅力度は5。／魅力度のメンバー平均は5.50 (SD=0.76)

(ファシリテーターの感想)

ファシリテーター1：沈黙の居心地の悪さを発言したことは自分にとってもよかったし、メンバーが話すきっかけになってよかった。自分自身のことについて話すことに、少し抵抗。魅力度は7。

ファシリテーター2：第1セッションと第2セッションが上手くミックスされたような展開。適度な沈黙もあって、落ち着いて話しが展開。もう、それほど大きな介入は必要なさそう。メンバーの相互作用に任せて信頼している。魅力度は7。

《第4セッション》17:30-19:00

D子が「誰かに今日の話を話そうが明日につながるかと思う。ここでのこの体験を一人で抱えきれないような気がする」とこの日のグループ経験の収め方について触れる発言をする。E子は「私は誰にも話さない。これは、このメンバーにしか分からない」と発言したうえで、「このメンバーには、今後も会うことになるから、そんなに自分を出せないよね」と今回のグループの限界について触れる。ファシリテーター1が合宿型のEGと、今回の既知集団のEGとの違いについて気づいたことを発言する。B男とC子が合宿の場合との違いを質問。ファシリテーター1, 2が合宿型との違いをそれぞれに語る。(沈黙)

F子が「EGの目的は、自己理解ということだが、自分はできていないようで不安。EGで人は変わるんですか?」と質問する。ファシリテーター1よりF子へ「F子こそ、そうやって自分から話し出すなんて、変わったような気がする」とフィードバック。C子が「終わってからしみじみ思い出すのが貴重なんじゃないかと思うんですけど」とF子の質問に答える。D子より、A男の発言が少ないことが気になっていると発言。A男は「自己理解」は難しいと発言。ファシリテーター2より、このセッションがもうすぐ終わることを伝えるが、特にメンバーからの発言はない。ファシリテーター1は、「ここで終わる感じではない」と発言。

〔メンバーの感想〕

A男：ファシリテーターと一緒に考えてくれる人。魅力度は6。B男：セッションを重ねるごとにファシリテーターを一メンバーとして見れるようになった。魅力度は6。C子：ファシリテーターは、一緒にここにいるという感じがした。魅力度は7。D子：ファシリテーターと一緒に場の雰囲気を楽しんでいるような印象。魅力度は7。E子：自分が話しにくかった理由を考えて、発言すると、メンバーの中にも、同感してくれる人がいて、ホッとした。魅力度は5。F子：無記入。魅力度は6。／魅

力度メンバーの平均は 6.17 (SD=0.69)

(ファシリテーターの感想)

ファシリテーター 1：ファシリテーターの 2 人ともメンバーとして自然にいたように思う。ファシリテーターとして意識して動く必要を感じることはない。魅力度は 5。

ファシリテーター 2：ファシリテーター 1 はメンバーの気持ちを汲みながらファシリテートしてくれていたと思う。私も自分の気持ちを「私は～感じる」といった具合にもっと伝えてもよかったかもしれないと今は思う。魅力度は 7。

《第 5 セッション》10:00-12:00

(男性だけ 3 人、なぜか固まって座っている)。ファシリテーター 1 が、昨日からの流れを振り返る発言をし、見た夢について語り、導入する。C 子、D 子、E 子、F 子と女性メンバーが前日のセッション後からこの日の朝、セッションに来るまでの間のことを語る。ファシリテーター 1 より「何か、つながってるけど違うよね。昨日と天気も違うし、男女の差も」と、グループ全体の印象をフィードバックする。(沈黙)。ファシリテーター 2 は、前日のセッション後からのいきさつと、いつもの EG 参加の時と今回のとでは朝の目覚めたときの気分が違っていたということを発言。これに触発され、A 男、B 男より、前日のセッション後に飲みに行ったことが語られ、B 男は、「みんな違うけどつながっている」としみじみ発言する。(沈黙)。ファシリテーター 1 が突然、お菓子の箱を手に取り、「お菓子の賞味期限が私の三十歳になる誕生日。」と驚いて発言する。D 子、E 子が女性にとしての年齢の扱い方について語る。

[メンバーの感想]

A 男：ファシリテーターは、話しの火付け役を兼ねていた。魅力度は 5。B 男：ファシリテーターは特に昨日と変わらず。魅力度は 5。C 子：ファシリテーター 1 が色々自分から話してくれたので沈黙が長すぎるという感じもせず、気分が和らいだ。魅力度は 7。D 子：ファシリテーターは、全般に沈黙が多いセッションにおいて、発言の回数が多かったように思う。魅力度は 6。E 子：今日の話の初めはファシリテーターから。魅力度は 4。F 子：ファシリテーターは、よい感じで場に溶け込んでいた。魅力度は 7。／魅力度のメンバーの平均は 5.67 (SD=1.11)

(ファシリテーターの感想)

ファシリテーター 1：みんながどういう気持ちでここへ今日、来たのかを分かち合えたし、そのきっかけづくりをした。しかしこれはファシリテーターとしてやったのではないような気もする。F 子が楽しみにして来てくれたのが何よりだった。魅力度は 7。

ファシリテーター 2：私の、昨日とのつながりにつ

て発言を受けて、A 男が発言してくれてよかった。B 男の「みんな違うけど繋がっている」という一言で、何かスッキリと一言でみんなの共有できる感じを表現してもらったような気がした。F 子は、もっと発言したような感じがしたのが気掛かりだった。魅力度は 7。

《第 6 セッション》13:00-15:00

(沈黙)。前のセッションが女性メンバー中心に展開したため、ファシリテーター 2 の「<男、30 歳何てことない>という発言から導入し、男性メンバーに振る動きをする。この発言を受け、A 男が「稼がない負い目」について発言する。ファシリテーター 2 が、A 男の発言に理解しにくさを感じ、「<「負い目」感じるの?><何で?>とファシリテーター 2 が A 男に尋ねる。A 男は、大学入学が人より後れたことを、やや言いにくそうに語る。ファシリテーター 2 は納得する。ファシリテーター 1 より、「<ファシリテーター 2 も、みんなが働いてる間、学生だった頃があったと思うけど、どうだったの?>と A 男とファシリテーター 2 のやり取りに入ってくる。ファシリテーター 2 は病氣療養のために 3 年後れて大学入ったことを打ち明け、自身の場合は、「<そこからまた、ゼロから自分を作り直す必要があると思ってたからか、『自分は、自分だ』という開き直りがあったような気がする。>と大変だったころを振り返って語る。D 子が就職した頃の頃、仕事の内容が面白くなかったこと、今は他の人と比較して 10 のうち 2 くらいいいことあったら、それでいいと思っていると大変だったころを振り返って語る。(長い沈黙)。眠そうなメンバー。ファシリテーター 1 より「<あと一時間! それぞれが後悔がないように終わって欲しいと思うんですが…>と発言し、メンバーの発言を促す。E 子が、人より後れを取ることについての A 男の発言に共感する。F 子は、聴講生という身分に対して、「これでいいんだ」と思うと、今ここでの自分について語る。C 子は「順調に来てしまって、立ち止まってゆっくり進路のこととか考えたことないので、そうやって来ている人たちをうらやましく思う」と、後れを取ることについての一連の展開について思うところを話す。B 男が「いろんな人…。こんなに違う人がここに集まっている…不思議。」としみじみ発言する。ファシリテーター 1 が「<狭い人間関係の中にさまざまな人がいて、面白い>と B 男の発言に同感する。A 男は「人と比較してもしょうがない。比較するとすれば、それが自分を振り返るきっかけになればいい」と後れを取ること、後れを取った人と比較することについて気づいたことを語る。ファシリテーター 1 が A 男へ「<比較するということについて、初めはネガティブなイメージを持っていたようだったけど、今はポジティブなようで、ほっとした。よかった>とフィードバックする。B 男は「いい体験ができた。ホントに無理しないで」とグルー

プの展開を振り返って語る。ファシリテーター1が<そう言ってもらえて、ほっとした>とB男に返す。C子が「みんなで、『ファシリテーターはメンバーと変わらない』って、言ってたんですが、ファシリテーターの話しを聴いていると、ファシリテーターということ意識していたんだと思った」とファシリテーターにフィードバックを返す。ファシリテーター2が、<僕は、こういう（メンバーの人もいっしょになって引っ張っていってくれるような）グループの展開の仕方が好きで…、ここにいる皆さんの力があつたからこそ、こういう感じのグループが仕上がったんだと思う。ファシリテーター役割のついてる人以外にも、グループを引っ張ってくれたりする人が出てきてくれたり。特に、C子さんやD子さんにはお世話になりました。Cさんは、先輩としての発言みたいのもあつたし、すごくサポーターに接してくれたりもしたけど、それが全然無理がなくてやれるところが、すごいなと思った。それから、D子も、年長者として、言っていただけることが、いろいろあって、ありがとうございました>とグループ全体へポジティブなフィードバックを返す。C子が「ファシリテーターはメンバーと変わらない」と発言する。ファシリテーター1・ファシリテーター2は、メンバー全員へ<ありがとう。>と返す。

#### [メンバーの感想]

A男：ファシリテーターは影の立役者。最後の言葉は印象的であたたかみを感じた。魅力度は6。B男：ファシリテーターは、表面的にはメンバーとして見えるように見えたが、すごく大切な役割を果たしてきてくれたと思う。このグループらしい終わり方ができた。魅力度は6。C子：ファシリテーターは長い沈黙の中で、ほどよいタイミングで発言をしてくれたことで、気分が和らいだ。全体の雰囲気や様子について、ファシリテーターがポジティブなフィードバックをしてくれたことが嬉しく、心地よい気分でグループを締めくくることができた。魅力度は7。D子：最後のまとめに入り、ファシリテーターの存在を再確認した。魅力度は7。E子：セッション中はあまりファシリテーターの存在を意識しなかった。セッション・アンケートを書き始めてファシリテーターの存在を思い出した。魅力度は6。F子：ファシリテーターの存在はあまり意識しなかった。魅力度は7。/魅力度メンバーの平均は6.50 (SD=0.50)

#### (ファシリテーターの感想)

ファシリテーター1：A男が発言したことにホッとして、これでグループが終わりに向かえると思った。ファシリテーター2の最初の男性としての発言があつて、A男が救われたよう。なかなか上手く言えずにいたことを最後にフィードバックできてよかった。魅力度は7。

ファシリテーター2：メンバーそれぞれにまとまった

発言の時間があり、それぞれの持つ異質なところが共有できた。ファシリテーターとして、グループの展開についてをフィードバックした。魅力度は7。

### 3. 参加後の気持ち

#### [メンバーの参加後の気持ち]

A男：日常では体験することのないさまざまな沈黙を体験した。それぞれ立場の異なる人々の出会いの場である。出会いの妙は、セッションを重ねるにしたがつてありありと感じられるようになった。他者の人生と自分のそれを比較してしまうことについて、自分の人生は「これまで」のことであり、「これから」の人生を確認するきっかけとなるものではなかろうか。そういうポジティブな方向が少し見えた。満足度は6。B男：初めは不安のほうが大きかったが、セッションが進むごとに不安は消えていき、最後は充実感を持てた。他のメンバーもそう感じてくれているといい。満足度は6。C子：最初は、一人のメンバーとして、どういう態度で参加すればいいのか戸惑った部分があつたが、セッションの回を重ねるごとに、そうしたことを意識しなくなった。とても静かなゆつたりとした時間の流れを感じるグループだったように感じる。このEGという保障された空間の中でこのような体験ができたことは、とても有意義で貴重なことのように感じられた。満足度は7。D子：一つ一つのセッションの中で、あるいは全部のセッションを通じて様々な変化を体験することができた。これは期待以上の結果だった。自分の心の動きに今回ほど真剣に向き合う機会は今まで経験のないことでした。グループの変化については、静かではあるが元気になろうとするエネルギーを感じました。グループのつながりについては、次第に気持ち一致していくように感じました。満足度は7。E子：グループが終わったことが何かさびしく感じた。2日間を振り返ってみると、自分の中に不思議な動きが始まったよう。グループのメンバーは、それぞれ違う質を持っていて、誰と接することも私にとって異質との出会いである。参加する前に期待は高かったが、何か得なければならないと今は思っていない。この体験自体が私にとって貴重である。それだけで十分ではないかと思う。満足度は6。F子：参加前はEGにそれほど大きな期待はしていなかったが、期待していた以上に自分の中で何かが変わったと思う。今の自分に少し自信が持てるようになったし、自分のこともさらに好きになった。満足度は7。/満足度メンバーの平均は 6.60 (SD=0.49)

#### [ファシリテーターの参加後の気持ち]

ファシリテーター1：長すぎず短すぎず、程よくいい時間を過ごせた。同質集団のグループになるだろうという最初のイメージは全然違うことが分かり、それでいて居心地よく、みんなが居れたと思う。満足度は7。

ファシリテーター 2：第2セッションでは、第1セッションでの、あまりにも順調すぎて、できすぎたすべり出しを調整するための沈黙が起こったのが印象的な展開だった。その後は自然なゆったりとした展開が続く流れができた。満足度は7。

#### IV. 考 察

先に述べたように、本事例の「ペア・ファシリテーター方式」における“ペア・ファシリテーター体験”と、(先行研究で記述・考察されている)「コ・ファシリテーター方式」における“コ・ファシリテーター体験”との比較考察等を行う。

##### 1. 「ペア・ファシリテーター方式」と「コ・ファシリテーター方式」の類似点：＜相補性＞

今回の「ペア・ファシリテーター方式」では、ファシリテーターの2人のうち一方がメンバー的な立場から発言している時や、特定のメンバーにコミットしている時は、他方が全体を見ている役割を取る形で、2人のファシリテーターのファシリテーションの＜相補性＞が、概ね保たれていた。例えば、第6セッションにおけるA男とファシリテーター2のやり取りで、ファシリテーター2が、A男の発言について、互いの体験の近さからかえって理解できないでいる時に、ファシリテーター1が、2人のやり取りに介入したことで、A男とファシリテーター2の互いの理解が深まった場面などである。

ファシリテーターから見て、配慮を必要とすると思われるメンバーが往々にして、グループの中に一人いるものであるが、今回のグループでも、ファシリテーターの2人がそれぞれ別々のメンバーに配慮が必要だと考え、セッション中に配慮する動きをしていた。こうしたファシリテーターの＜相補性＞的關係は、グループの展開に貢献したように思われる。

こうした＜相補性＞は「コ・ファシリテーター方式」の場合でも認められる(内田・野島, 2002)。つまり、＜相補性＞ということは両者において類似している点であると言える。

ちなみに、「ペア・ファシリテーター方式」も「コ・ファシリテーター方式」も別の視点から見れば、「複数ファシリテーター方式」である。「複数ファシリテーター方式」における＜相補性＞の重要性について、これまでの研究では、次のように指摘されている。村山(1979)、野島(1982)は、「相互に盲点を補い合えることから、ファシリテーターの持つ性格特性や、それまでの人生経験などについて相補的關係であるほうが望ましい」と述べ、＜相補性＞の大事さを強調している。また、林(1990a)も、「複数ファシリテーター方式」において、

ファシリテーター間の＜相補性＞があることは、ファシリテーター関係の良好さを示すとしている。さらに林(1990b)は、ファシリテーター関係の良好さは、グループ・プロセスの発展と関係が深いと指摘している。

##### 2. 「ペア・ファシリテーター方式」と「コ・ファシリテーター方式」の相違点：＜自信のつき方＞

福田・野島(2002)は、「コ・ファシリテーター方式」におけるファシリテーター候補者の体験として、ベテラン・ファシリテーターがいてくれる安心感の中で実践ができるということを述べている。つまり、いざという時には、すぐに頼れる人がいる中で、ファシリテーションを行い、ファシリテーターとしての自信をつけていくのである。

それに対し、今回の「ペア・ファシリテーター方式」では、2人のファシリテーター候補者だけで組むため、経験のなさから来る不安を抱えざるを得なかった。2人のファシリテーターとも、参加前の気持ちについて、「不安」という言葉を用いて記述している。しかし、不安を抱えながらも、第1セッションでスムーズに導入ができた。第2、第3セッションでは、セッション中の沈黙について扱うことができた。そしてこあたりから、不安を乗り越えることができた。こうしたプロセスを(ベテラン・ファシリテーターなしで)ファシリテーター候補者だけで乗り越えたことは、＜自信のつき方＞が「コ・ファシリテーター方式」とは異なると考えられる。

##### 3. 「ペア・ファシリテーター方式」と「コ・ファシリテーター方式」における＜権威性＞の問題の検討

内田・野島(2002)は既述したように、「コ・ファシリテーター方式」においては、コ・ファシリテーターが、ベテランのファシリテーターの権威や支配性に萎縮し従うばかりでは、ベテランのファシリテーターに呑み込まれるかもしれないという危険性を指摘している。保坂(1983)も、ベテラン・ファシリテーターの存在は、メンバーからも「特別な存在」と認知されやすく、メンバーのファシリテーターへの依存・甘えが生じる危険性があり、依存・甘えはメンバーの自己成長を妨げかねないものであると述べている。

これに対し、今回の「ペア・ファシリテーター方式」のファシリテーター候補者は、メンバーからの「ファシリテーターは、メンバーとかわらない」という発言に見られるように、ベテランのファシリテーターがセッションに入っていないことから、メンバーから見て＜権威性＞を感じさせる存在であったり「特別な存在」と認知されてはいなかった。これにより、メンバーのファシリテーターへの依存・甘えがあまり生じることなく、第3セッションのE子、第4セッションのD子などの「メン



バーのファシリテーター化」(野島, 2000) が起こりやすかったのではないかと考えられる。こうしたファシリテーターの《権威性の薄さ》が、「ペア・ファシリテーター方式」の大きな特徴であろう。

《権威性の薄さ》ということは、ファシリテーターにとってはどのようなメリットがあったのであろうか。それは「ファシリテーターのメンバー化」〔裏から見れば「メンバーのファシリテーター化」〕(野島, 2000) をしやすくすることにつながったように思われる。ちなみに下田(1988)は、ファシリテーターがグループの一員であることを十全に引き受けることによって、メンバーへの「リーダーシップの分散」を促すことにつながることを示唆している。そしてこのリーダーシップの共有を野島(2000)は、EGの大きな特徴の一つにあげている。また、村山編(1977)も、「ファシリテーターがグループの中で熟練者としてではなく、ひとりの人間として参加するとき、メンバーとファシリテーター双方に最大限の成長力があること」を強調している。

このようなファシリテーション技法は、本事例においては第1セッションのファシリテーター2の自己紹介における自己開示や、第5セッションのファシリテーター1の冒頭の自己開示に見られる。メンバーはグループの中で心を開いてお互いに率直に語り合う(野島, 2000)ことができなければならないが、これをファシリテーター自身が率先して実践できていたことも《権威性》を薄め、「リーダーシップの分散」を生じやすくさせることに貢献できていたと考えられる。

#### 4. 「ペア・ファシリテーター方式」と「コ・ファシリテーター方式」におけるスーパーヴァイザーの役割

「コ・ファシリテーター方式」におけるスーパーヴィジョンは、ファシリテーター候補者は、セッションとともに担当したベテラン・ファシリテーターと一緒にスタッフ・ミーティングをして、スーパーヴィジョンを受けることが特徴的である。

それに対し今回の「ペア・ファシリテーター方式」では、スーパーヴァイザーにあたるベテラン・ファシリテーターはセッションに入らないため、第三者的立場からスーパーヴァイザーしてもらうことになる。ファシリテーター候補者は、各セッションごとに、グループの展開を報告し、スーパーヴァイザーよりそれについてのコメントをもらうという形でスタッフ・ミーティングが行われていた。

スーパーヴァイザーからは、その時のセッション中のグループの展開が、どのような段階にあるかを、村山・野島(1977)の「EGプロセスの発展段階」などの指標に基づいてコメントをもらえたことから、ファシリテーターは、その時セッション中に起きている事柄が、どの

ような意味があるものかととらえやすくなった。特に導入期のスーパーヴァイザーが、セッション中に起こっていることの意味を理解するうえで、ファシリテーターにとって最も有効に活用できた。

#### 5. 「ペア・ファシリテーター方式」のファシリテーター候補者の必要条件

福田・野島(2001)は、「コ・ファシリテーター方式」におけるファシリテーター候補者の必要条件として、十分なメンバー体験の必要性を述べている。今回の2人のファシリテーターは、EGのメンバー体験がある程度十分にあることに加えて、ベテラン・ファシリテーターの下でコ・ファシリテーター体験があった。ちなみに筆者の場合は、メンバー体験が100セッション以上、1回のPeer-Facilitation Training 経験、2回のコ・ファシリテーター体験があった。ファシリテーター1も、メンバー体験が9回と、コ・ファシリテーター体験の経験者であった。これらのコ・ファシリテーター体験、「メンバー体験」をある程度積むことは、「ペア・ファシリテーター方式」のファシリテーター候補者の必要条件と言えよう。

#### 謝辞

本論文は、日本人間性心理学会第21回大会(2002年9月21日、神戸女学院大学)で口頭発表したものに加筆修正したものである。本論文作成にあたりご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院の高橋靖恵先生に感謝致します。

#### 文 献

- 福田 麗・野島一彦(2001)：ベーシック・エンカウンター・グループの「コ・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討、日本人間性心理学会第20回大会発表論文集、76-77。
- 福田 麗・野島一彦(2002)：ベーシック・エンカウンター・グループの「コ・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討、九州大学心理学研究、3、167-174。
- 林もも子(1990a) エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の重要性、心理学研究、61(3)、184-187。
- 林もも子(1990b)：コ・ファシリテーター関係に影響する諸要因、人間性心理学研究、8、90-99。
- 保坂 亨(1983)：エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの問題について、心理臨床学研究、1(1)、30-40。
- 村山正治編(1977)：エンカウンター・グループ、講座心理療法7、福村出版。

- 村山正治（1979）：私のオーガナイザーとしての経験，九州大学心理教育相談室紀要，5，109-114.
- 村山正治・野島一彦（1977）：エンカウンター・グループの発展段階.九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），21(2)，77-84.
- 野島一彦（1982）：エンカウンター・グループ構成論，福岡大学人文論叢，14(1)，1-32.
- 野島一彦（1985）：グループ・ファシリテーターの養成をめぐって，野島一彦・安部恒久編，第3回日本心理臨床学会自主シンポジウム（1984年，広島大学），日本グループ・アプローチ研究会資料.
- 野島一彦（1990）：グループ・アプローチ，小川捷之・鎌 幹八郎・本明 寛編集，臨床心理学を学ぶ，臨床心理学大系，13，金子書房，194-205.
- 野島一彦（2000）：エンカウンター・グループのファシリテーション，ナカニシヤ.
- 下田節夫（1988）：エンカウンター・グループの構造について，神奈川大学心理・教育研究論集，6，46-64.
- 内田和夫・野島一彦（2002）：ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成のための「コ・ファシリテーター方式」の意義に関する検討，日本人間性心理学会第21回大会発表論文集，82-83.